

巻頭言

〈小特集 1〉  
 間文化現象学・国際シンポジウム  
 〈あいだ〉と〈越境〉  
 ——間文化現象学の展開と新たなはじまり

Special Issue 1:

Betweenness and Transgression:

development and new beginning for Intercultural Phenomenology

2022年3月27日、国際シンポジウム「〈あいだ〉と〈越境〉——間文化現象学の展開と新たなはじまり」がオンラインで開催された。このシンポジウムは、間文化現象学研究センターの創設者である谷徹先生（現在、立命館大学名誉教授、文学部特任教授）の文学部教授退職（2020年3月）を記念した企画であり、谷先生が交流を続けてきた海外の研究者を招聘して行われた。と同時に、センターも10年間の活動を終えて次の構想を打ち出すタイミングだったので、その意味でひとつの区切りと新たなスタートを記念するものでもあり、「新たなはじまり」とも題された。もともとは2年前の2020年3月14日に開催する予定だったものであり、新型コロナウイルス感染症の影響で延期していたが、今回あらためてオンラインにて開催することとなった。

プログラムは以下のとおりである（時間は日本時間）。

16:00-16:10 開会挨拶 亀井大輔（立命館大学）

16:10-17:30 講演 ナミン・リー（ソウル大学校）

「フッサールの超越論的主観性とハイデガーの  
 現存在」

コメント：谷徹（立命館大学）、

質問：黒岡佳柁（中国・福州大学）、

- 司 会：鈴木崇志（立命館大学）
- 18:00-19:20 講 演：ミヒャエル・シュタウディグル（ウィーン大学）  
「生きられた宗教の両義性——宗教と暴力の関係を再概念化するための現象学的提案」
- コメント：谷徹、
- 質 問：蛭子良風（立命館大学大学院）、
- 司 会：亀井大輔
- 19:30-20:50 講 演：ゲオルク・シュテンガー（ウィーン大学）  
「〈あいだ〉から〈変形〉への往還—普遍主義と個別主義およびグローバル性とローカル性を越える新たな動き—」
- コメント：谷徹、
- 質 問：神田大輔（立命館大学）、
- 司 会：加國尚志（立命館大学）
- 20:50-21:00 謝辞・閉会挨拶 谷徹・加國尚志

各セッションでは発表者に50分程度の講演をしていただいた後、谷先生がコメントをしてやりとりをし、次いで原稿の日本語訳者に特定質問者として質問をしてもらい、その後ウェビナー参加者からの質問を受け付ける、という流れで進行した。

それぞれの発表を簡単に紹介しておこう。ナミン・リー先生の講演は、フッサールの「構成」とハイデガーの「解釈」が、これまでの研究史において、超越論的現象学と解釈学的現象学のように対立的な関係として誤って理解されてきたことを指摘しながら、最新の研究にもとづいて、「世界」という観点から両者のあいだにある「根本的な類似性」を示すものであった。

ミヒャエル・シュタウディグル先生の講演は、宗教と暴力の関係という問題に、シュッツの現象学的社会学の理論を適用して考察するものだった。「聖

なるもの」などの超越的なものとの遭遇に潜む暴力、日常的な社会的関係がそれによって変形を引き起こされるという暴力、さらには宗教的な知識体系を言語によって物語ることに潜む暴力が、その両義性ととも明らかにされた。

最後の講演者ゲオルク・シュテンガー先生は〈間文化性〉の哲学を提唱した第一人者であり、いわば当センターの理念が由来するところの重要人物である。シュテンガー氏は、西洋と東洋（中国と日本を含む）の、古代から現代までの——文字通り古今東西の——諸哲学を手がかりにしながら、さまざまな〈あいだ〉をどのように考えればよいのかをめぐって考察を繰り広げた。その浩瀚な考察とたいへん精力的な発言にはセンターに対する助言や激励の意味もあるように思われた。以上の講演と議論は、まぎれもなく谷先生と間文化センターを「記念」するものだった。

この小特集は、シュテンガー先生の講演原稿の日本語訳と、発表者3名に対する谷先生のコメントを掲載し、シンポジウムの記録とするものである。なおリー先生とシュタウディグル先生の英語原稿は『立命館文学』第665号（谷徹教授退職記念論集）に、日本語訳は『立命館哲学』第32集に掲載されているので、併せてご参照いただければ幸いである。なお当日の様子録画は立命館大学・人文科学研究所HPの「イベント」より閲覧可能である（現在は同時通訳音声抜きのオリジナル音声のみ限定公開中）。

立命館大学文学部教授  
亀井 大輔

